

日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析

加 藤 重 広

1. 数量詞をめぐる問題

日本語の数量詞 (quantifier) に関する問題はこれまで様々なかたちで考察されてきており、論点は整理されてきたように見える。

- 1) 子豚が三匹いました。(NCQ タイプ)
- 2) 三匹の子豚がいました。(Q-no-NC タイプ)
- 3) 子豚三匹がいました。(NQC タイプ)

奥津 (1996a, b) などに倣って、(1) (2) (3) をそれぞれ NQC, Q-no-NC, NQC と表示することにする¹⁾と、論点のひとつは、これらのタイプの間に派生関係を認めるか否かということである。認めない立場 (井上 (1976) など) では、(1) の NCQ タイプの数量詞はもともと《副詞》として生成されたと見なされるが、これに対して、派生を考える立場は、(2) の Q-no-NC から (1) の NCQ タイプが派生されるとする考えと、(3) の NQC から (1) の NCQ タイプが派生されるという考えとに大きく分かれる。派生を想定する立場は、数量詞遊離という操作を想定することになる。現在では、派生関係を考えない立場をとる研究のほうが多いようである。

また、数量詞と格助詞の制約も古くから指摘されている問題である。NCQ タイプで用いられる数量詞 (これを以下、遊離数量詞²⁾と呼ぶ) は、格助詞が「が」「を」の場合には問題がない。

- 4 a) 三冊の辞書を買った。(Q-no-NC タイプ)

1) 奥津 (1996a, b) は、NCQ 型, Q/NC 型, NQC 型のように表記している。

2) 数量詞について「遊離」と表現するのは変形移動を想定する場合であることもあるようだが (→『言語学大辞典第6巻・術語編』の「数量詞」の項 (p.7751)), 本論では派生そのものを想定しない立場をとりつつも「遊離数量詞」という呼称を用いる。これは、「副詞的数量詞」や「連用数量詞」などの名称に比べてやや一般性が高いという理由による。これに対して、Q-no-NC タイプの数量詞は特定の呼称で括られることは少ないようだが、本稿では便宜的に「連体数量詞」と呼ぶことにする。國広 (1981) では、本稿の連体数量詞を「数量詞の前位置用法」、遊離数量詞を「数量詞の後位置用法」と呼んでおり、この「数量詞の後位置用法」は動詞の直前にある場合を指すと定義されている。しかし、後者は「本を3冊買う」が「3冊本を買う」のようになることもあり、必ずしも動詞の直前にあるわけではない。本稿の遊離数量詞は、「3冊本を買う」タイプの数量詞も含めて用いる。

4 b) 辞書を三冊買った。(NCQ タイプ)

一般にこれ以外の助詞では非文になるとされる。

5 a) 三人の友達からお金を借りた。(Q-no-NC タイプ)

5 b)*友達から三人お金を借りた。(NCQ タイプ)

6 a) 三軒のスーパーマーケットで買い物をした。(Q-no-NC タイプ)

6 b)*スーパーマーケットで三軒買い物をした。(NCQ タイプ)

(5b) (6b) では、遊離数量詞を用いた文が非文となるが、(7b) では非文にならない。³⁾

7 a) 私は二・三軒の団体客専門の旅館にあたってみた。(Q-no-NC タイプ)

7 b) 私は団体客専門の旅館に二・三軒あたってみた。(NCQ タイプ)

遊離数量詞を用いた NCQ タイプの文は、格助詞「に」を用いた場合に許容度の高い場合が見られるが、ほかの助詞ではあまりないとされている。高見(1996)では、「から」という助詞での遊離数量詞の例文が提示されたが、この分析は問題を含んでおり(2.2.節で取り上げる)、反証になるとは考えられない。この NCQ タイプの文と格の関係は、この種の制約を表層格で処理するか、意味を考慮に入れた文法格で処理するかという問題につながる。

また、Q-no-NC タイプと NCQ タイプで意味が異なる場合がある。

8 a) 十二段の石段を上った。(Q-no-NC タイプ)

8 b) 石段を十二段上った。(NCQ タイプ)

この2種類の文は、常に意味が異なるわけではないが、(8a)は、石段の段の総数が十二段あり、その石段を上ったと解釈するのが普通で、(8b)は石段の段の総数は分からず、十二段以上あるであろうと推測するのが普通である。これは、数量詞の意味が異なって解釈されるためだと考えられる。この問題は、数量詞が属性を表すかどうか、数量詞が全体量を表すか部分量を表すか、数量詞と関わる名詞句が定か不定か、といった観点から考察されている。

このほかに遊離数量詞が状態を表す述語の場合には使えないということも指摘されている。

9 a) 二・三人の学生は優秀だ。

9 b)*学生は二・三人優秀だ。

数量詞と述語相の性質(aspectuality)も議論すべき問題である。矢澤(1985)や奥津(1996b)は、開始のアスペクトをもつ動詞、完了のアスペクトをもつ動詞などと遊離数量詞の関係について論じている。

本稿では、まず「数量詞」の様々な形を網羅的に議論できるように、その用語を定義することから始める。「数量詞」の定義は単純なようで厄介な問題を含んでおり、数量詞分析のアプローチ

3) (7b) は井上(1978: 173)の例文「私は団体客を泊める宿屋に2, 3軒あたってみた」を加藤が改変したもの。(7a)はそれに対応するQ-no-NCタイプの文として作成した。

ちに直結する問題も含んでいるので、避けて通るわけには行かない。その後で、まず NCQ タイプの数量詞（遊離数量詞）の性質について多角的に分析を試みる。次に、Q-no-NC タイプの数量詞文（連体数量詞文）の意味と NCQ タイプの数量詞文（遊離数量詞文）の意味の違いを分析する。これら連体数量詞と遊離数量詞の差異は、従来の意味統辞的な準位だけでなく、談話文法のレベルでの分析が必要である。多くの例文に当たりながら、話者の認知がいかに反映されるかについて、一つの仮説を示し、あわせてその検証を行う。

2. 数量詞とは？

2. 1. 特定数量詞と不特定数量詞

数量詞とは何かということは厳密に定義しておいたほうがいいはずである。しかし、単純に「数量を表す語」という理解があれば十分ということなのだろうか、多くの論考では、数量詞は定義されないままである。

10a) 祐子は北陸自動車道を250km走り、休憩をとった。

10b) 祐子は北陸自動車道をかなり走り、休憩をとった。

11a) 義雄はひとりで牛肉を200g食べた。

11b) 義雄はひとりで牛肉をたくさん食べた。

たとえば、(10a)の「250km」は数量詞として扱われるが、語彙の機能という観点から見れば同じように距離を表している(10b)の「かなり」も数量詞であるはずである。(11b)の「たくさん」も(11a)の「200g」と同じように量を表している。両者の違いは、「250km」「200g」が具体的単位を伴った特定の数量であるのに対して、「かなり」「たくさん」は類別辞はなく、不特定の数量を表すにすぎないということである。以下、前者を**特定数量詞**、後者を**不特定数量詞**と呼ぶことにする。不特定数量詞は、これまでの日本語の数量詞研究でもあまり光を当てられなかった領域と言えるだろう。

不特定数量詞は、数量そのものを明確に表すわけではないが、一般に価値判断を含んでいる。たとえば「250km」は普通は決して少くない距離ではあるが、あまり長距離を運転することのないドライバーには「非常に長い距離」であろうし、長距離輸送をなりわいとする人にとっては「それほど長くない距離」かもしれない。「250km」自体は、長いか短いかには言及していない。しかし、「かなり」は長い距離であるという判断を含んでいる。

12a) 今のところ250km走っただけだ。あと500km近く走らないといけない。

12b)*今のところかなり走っただけだ。あと500km近く走らないといけない。

(12b)が非文となるのは、少ないという判断を表す「だけ」と多いという判断を表す「かなり」が共起しているため、文意の解釈に矛盾が生じるからである。

不特定数量詞には特に多寡に関する判断を含まない「すべて」「全部」といった全称数量詞も含まれる。これらは全体を量として指し示すという点でやや特異な性質を有していると考えてよいだろう。

また、先に特定数量詞は類別辞を含むのに対して不特定数量詞はこれを含まないという対比を行ったが、不特定数量詞にも意味的に類別辞に相当する要素を含むものがある。

13a) 学生は全員来ました。

13b) *品物は全員来ました。

「全員」は人間にしか使えない。また、「数」と類別辞の合成による「数件」「数本」は、類別辞を含んでいるが、特定数量を明示しているわけではなく、いわば不特定の数量を指し示していると考えられることができる。とは言え、「数件」は「一件」を指すことはないし、「百件」を指すとも考えられない。これらは、明示的に特定数量を表すわけではないが、一定の幅を持っており、完全に不特定の数量を表しているわけでもない⁴⁾。また、「たくさん」「少し」「かなり」のように多寡に関する判断を含んでいる不特定数量詞とは異なり、特に多寡に関する判断を含むものでもない。しかも、統辞的な振る舞いを見ると、特定数量詞に似ている点が多いのである。

14a) 石段を十数段上った。

14b) 十数段の石段を上った。

15a) その石段は十数段もあり、疲れた。

15b) その石段は十数段しかなく、楽に上れた。

NCQ タイプである (14a) では石段の総数は分からない。逆に、(14b) の Q-no-NC タイプでは石段の総数が「十数段」と解釈するのが普通である。これは、(8a) (8b) で見た特定数量詞と全く同じである。また、(15a) (15b) に見るように、「十数段」は多寡に関する判断は特に含まず、価値判断に関して中立であると言える。これも特定数量詞の場合と同じである。また、数量の特定度に関しても、特定数量詞ほど厳密な指示ではないにしろ、ある程度の幅のある指示⁵⁾はしている。以上のことを考えあわせると、「数」を含む数量詞は特定数量詞の変種と考えたほうがよいだろう。

特定数量詞は、一般に数詞と類別詞（助数詞）の組み合わせでできている。「15冊」「6人」などを見れば一目瞭然である。また、この場合の類別詞には厳密には、数量単位と言うべきキ

4) 「数十日」などのように、「数」は数量の桁に関しても言及する。「数」は一般に「四から六ぐらいまでの範囲」（『岩波国語辞典第5版』の「数」の項）を指すと了解してよいが、「近ごろは三か四かの程度を言う人が多くなった」（同辞典の補足）ということもあるようだ。

5) 実際は「幅」も多様である。「数人」ではせいぜい3人から8人程度としても5～6程度の幅しかないが、「数億の粒子」とすると5億～6億という幅があることになる。

ロメートルやリットル, グラム, 平方メートルなども含めることにする。奥津 (1969: 48) では, 「数量的表現 (numerical)」を「数詞 (numeral)」と「助数詞 (classifier)」の組み合わせからなるとしているが, この定義には問題がある。まず, 類別詞が欠落することがありうるが, このことが考慮されていない。

16a) その店で私はみかんを20個買った。

16b) その店で私はみかんを20買った。

類別詞の欠落している数量詞表現は通常の談話でも特に珍しいということとはなからう。(16b) は「20ほど」とか「20ばかり」とするとさらに自然になるが, (16b) のままでも特に非文と言うことはあるまい。こういった類別詞の欠落は, Q-no-NCタイプでは起こりにくい。(16c) は通常の発話では聞かれない。

16c) ???その店で私は20のみかんを買った。

同じ構文でも20ではなく3だと類別詞がなければ非常に不自然である。

17a) その店で私はみかんを3個買った。

17b)*その店で私はみかんを3買った。

(17b) では「3ほど」「3ばかり」としたところで容認しがたい。また, (16b) では, 無条件に「20個」の意であると確定できるわけではない。「20kg」の可能性を排除するにはそれなりの文脈が必要になる。どういう条件下で類別詞の省略が可能なのかは興味ある問題であるが, 今回は以上の指摘にとどめておく。

奥津 (1969) の定義の問題点はもうひとつある。不特定数量詞が数量詞の定義に含まれないことである。奥津は, NQC を基底形とし, NCQ が派生されるという数量詞移動を考えているが, 不特定数量詞は念頭にないようである。不特定数量詞は特定数量詞と異なる点が多いが, 排除するわけには行かない。

さて, 「たくさん」「かなり」「少し」といった典型的な不特定数量詞は, 語彙群としてみたとき, 特定数量詞と異なり, 統語的な性質が均一でない。最初に見たように, 特定数量詞は通例, NCQ タイプ, Q-no-NC タイプ, NQC タイプのいずれもが可能であるが, 不特定数量詞では, NQC タイプが非文になるものがある。

18a) 観光客が多数来園しました。

18b) 多数の観光客が来園しました。

18c) 観光客多数が来園しました。

19a) 新入生がたくさん入部しました。

19b) たくさんの新入生が入部しました。

19c)*新入生たくさんが入部しました。

先に見たように奥津 (1996a) などでは, NQC タイプを基底形とし, そこから数量詞が遊離

して NCQ タイプの文が派生されるという移動変形を考えているが、「たくさん」など一部の不特定数量詞に関しては、基底形とされる形そのものが非文となってしまう。これは直ちに、NQC タイプから NCQ タイプへの数量詞移動変形を否定することにはならないが、この種の移動変形の正当性の主張には、不特定数量詞を特定数量詞と同列には扱えないこと、不特定数量詞の内部で統語的な不均一性があることなどの説明が不可欠の前提になる。

2. 2. 遊離数量詞の副詞性

遊離数量詞は連用修飾成分の位置に現れる。しかし、これが副詞的な働きをしているということと同値であると単純に考えるわけには行かない。

20a) その作家は机の上に積まれた百冊の本にサインした。

20b)?その作家は机の上に積まれた本に百冊サインした。

20c) その作家は机の上に積まれた本にもう百冊以上サインした。

20d) その作家は机の上に積まれた本にはまだ三十冊しかサインしていない。

21a) 百枚の封筒に宛名書きした。

21b)?封筒に百枚宛名書きした。

21c) 封筒にもう百枚以上宛名書きした。

21d) まだ封筒に二十枚しか宛名書きしていない。

実は、(20b-d) (21b-d) の文法性の判定は微妙である⁶⁾。しかし、(c) (d) のように「以上」や「しか」がつくほうが、単独で用いられている遊離数量詞よりも文法的にやや自然なのである。一般の発話では、数量詞は「くらい」「も」「以上」「程度」などをつけて使うことが少なくない。これらの統語的な特性は異なるが、いずれも数量詞に後接して連用修飾成分になることがあるという点では一致している。高見 (1996) では、カラのついた NP からの数量詞遊離の例として、次の文⁷⁾を示している。

22a) 目標金額を達成するには、教官が全員寄付し、その上、学生から20名以上集めなければならない。

しかし、(22a) は遊離数量詞に「以上」がついている。上で見たように「以上」がつくことで連用修飾成分になりやすいということがあるのだとすれば、単独では遊離しにくい数量詞が「以上」を伴うことで不自然さが多少減じるということも考えられる。現に、(22a) から「以上」

6) (20b) (21b) は非文とするほどではないというのが加藤の判定である。少なくとも (20b-d) (21b-d) が*や?で表されるような整然としたグラデーションになるわけではない。

7) 下線は予稿集原稿にあるもの。カラの NP からの遊離としてあげられているもうひとつの例文「僕は元旦に教え子から5年賀状をもらった」は、加藤の判断では、*を付していい程度の不自然な文である。

を取り除くと、(22b)のようになり、不自然さが増す。

22b) ???目標金額を達成するには、教官が全員寄付し、その上、学生から20名集めなければならない。

これは(22a)に比べるとかなり不自然である。「以上」の有無が文法性の認定に影響するのだとすれば、これは数量詞遊離の例文としては不適切である。

数量詞に関する考察で我々が意を用いるべきは、単に「数量詞」と言ったときに、「3つも」「20名以上」など数量を表すものに別の文法的・語彙的要素がついているものも含めるのかという問題である。むろん、「数量詞」にそういったものを含むというのでも構わないが、分析していく過程においては、純粋な数量詞部分のみからなる**数量詞**とそれに別の要素がついているものはどうしても区別されなければならない。「20名」と「20名以上」を区別しないのでは、分析の方法そのものの有効性を疑われても仕方がない。本稿では、前者のみを数量詞と呼び、数量詞に他の文法的要素・語彙的要素が後接したものは**数量詞句**と呼んで区別しておくことにする。もしも、(22b)が不自然で、(22a)がそれより多少なりとも文法的に受け入れやすいのだとすれば、「20名」という数量詞の遊離が可能であることの説明にはならない。いわば「以上」がつくことでその数量詞句がより副詞的になったということは言えるかもしれないが、カラのついたNPからの数量詞遊離の例にはならないのである。

2. 3. 連体数量詞に対応しない遊離数量詞

一般にNCQタイプの構文には、意味の差こそあれ、それに対応するQ-no-NCタイプの構文が存在している。例えば、(23a)には(23b)が、(24a)には(24b)がそれぞれ対応する。

23a) その講義には学生が6人出席した。(NCQタイプ)

23b) その講義には6人の学生が出席した。(Q-no-NCタイプ)

24a) 可奈子は辞書を3冊買った。(NCQタイプ)

24b) 可奈子は3冊の辞書を買った。(Q-no-NCタイプ)

しかし、時間や回数、費用などを表す場合のほか、変化量や程度差を表す場合には、遊離数量詞に対応する連体数量詞が存在しない。つまり、Q-no-NCタイプの構文は作れない。

25a) 剛は本を2時間読んだ。

25b)*剛は2時間の本を読んだ。

26a) 彼女は南アフリカを2度訪れている。

26b)*彼女は2度の南アフリカを訪れている。

ほかに、奥津(1969)や奥津(1996b)は、いわゆる時称詞も数量表現に含めているが、「1995年10月10日に長男が生まれた」などの「1995年10月10日に」は、「に」という格助詞を伴っており、また量的なものを表しているのではない。つまり、格助詞を伴うという点では遊離数量詞

と一線を画しており、量について言及しないという点でも数量詞の範疇に入るものではない。時称詞は、「今日・明日・来週・先月・再来年」のような相対的時点を表すものは「に」を伴わず、「江戸時代・1996年」など発話時点と関係なく指示できる絶対的時点は「に」を伴うものとされている。後者は、場合によっては「に」を伴わないこともある。前者は、本来名詞と見えるものが副詞的に用いられているという点で数量詞と共通するところがあるが、本稿では数量詞に含めない。数量詞とは、「数や量に関する表現」ではなく、「数量」を表示するものと捉えることにする。従って、速度を表す「時速40km」などは数量詞と見なさない⁸⁾。

つぎに**変化量**について見ておこう。これは、「ちぢむ・ちぢめる・のびる・のばす・増える・増やす・減る・減らす・広がる・広げる・狭まる・狭める・削る」などの動詞とともに用いられるものである。これらは、そもそも《数量的変化》を表す動詞である。従って、一語の動詞でなくとも、意味的に《数量的変化》を表す動詞的表現ならよい。具体的には、「増加する・拡張する」などのサ変動詞や「大きくなる・小さくなる・少なくなる」などの形容詞の連用形と「なる」からなる表現などである。

矢澤（1985：97）は、数量詞を遊離し得ないものの例の一つに、以下のような例を挙げている。

27a) 十秒三の世界記録を更新した。

27b) 世界記録十秒三を更新した。

27c)*世界記録を十秒三更新した。

（27c）は「更新する」を「タイムを縮める」の意味に解すれば、「縮められた時間が十秒三である」と解釈して容認されうるが⁹⁾、これはそもそも数量的変化を表す動詞にかかる連用成分として「十秒三」があるのである。つまり、たまたまヲ格の名詞句が同一節内にあり、それに遊離数量詞をつけて Q-no-NC タイプの構文を作っても意味が通るというだけのことである。これは別に、（27c）と（27a）が派生関係にあったり、一方が他方の基底形であったりするというわけではない。形態的には連体数量詞文と遊離数量詞文のペアのように見えるが、全く別の文なのである。次節以降で詳しく論じるが、ヲ格名詞句がある場合は、一見対応するペアのように見える組み合わせを作れる次のようなものがある。

28a) 北陸道を480km走った。

28b) 480kmの北陸道を走った。

形態的には、NCQ タイプの遊離数量詞文と Q-no-NC タイプの連体数量詞文のペアに見えるが、

8) 副詞的に速度を表す場合もやはり格助詞「で」を伴い、「時速70kmで走る」のようになる。

9) このことは奥津（1996b：104）にも指摘がある。奥津は、単純に「変化動詞文」という言い方をしているが、単なる変化では広すぎるので、《数量的変化》という限定をするほうがより厳密になる。なお、（27c）のアステリスクは矢澤（ibid.）にあるもの。

(28a)と(28b)は、派生関係にあるのではない。意味は全く異なる。(28a)は北陸自動車道を走ったが、その際の走行距離が480kmだということであり、北陸自動車道の長さには言及していない。一方、(28b)は、北陸自動車道そのものの長さが480kmだということであり、走行距離は全く言及されていない。たまたま「北陸道」と「480km」がQ-no-NCタイプでもNCQタイプでも（意味は異なるものの）成立するというだけのことに過ぎない。例えば、次の(29a)はQ-no-NCタイプの数量詞文にすることができない。

29a) 市内を20km走った。

29b)*20kmの市内を走った。

これまでの数量詞に関する議論の一部には、実際は派生関係にない別の文とすべきものを、派生関係があるかのごとく扱っているものがある。これは本来、議論が不毛なものにならないようにあらかじめ整理しておくべき事柄であるはずだ。この種のペアについては、3.1.節で再び論じる。

さて、気をつけるべきは、(28b)のような文は、ヲ格名詞句がなくてもよいということである。

30) 家を出てから5 km走って名神高速に乗った。

locativeと解される「を」のついた場所名詞句がない形は決して珍しくはない。むしろ、論理的には深層に場所名詞句があると考えても差し支えないが、上で見たようにその場所名詞句の連体数量詞と表層にある遊離数量詞は実は別のものなのである。

このほかに「かかる」という動詞と**費用や時間の遊離数量詞（句）**は、対応する連体数量詞文を持たない。

31) 駅まで20分かかる。

32) 金沢まで930円かかる。

これらは、そもそも数量表現に関わるガ格やヲ格の名詞句がなくても成り立つ。むしろ、「駅まで時間が20分かかる」「金沢まで運賃が930円かかる」のような文を想定して、「駅まで20分の時間がかかる」「金沢まで930円の運賃がかかる」とすることは可能である。しかし、こういった連体数量詞文は、意味的な余剰性を含んでいるため、通常の発話ではあまり聞かれない。遊離数量詞だけで名詞句がないというのは、「かかる」という動詞に特有であるというよりは、「…まで20分」と言えば移動に要する時間と分かるし、「…まで930円」と言えば運賃と分かるということと関係がありそうだ。現に「かかる」は以下のような文ではガ格名詞句をとる。

33a) お金がかかる。

33b)*お金 かかる。

33c) お金がかなりかかる。

33d) かなりのお金がかかる。

34a) 時間がかかる。

34b)*時間__かかる。

34c) 時間がかなりかかる。

34d) かなりの時間がかかる。

これらは格助詞「が」を欠くと不適切な文になる¹⁰⁾。また、連体数量詞文とそれに対応する遊離数量詞文が存在している。

このほかにも、次のような例文でも同じ原理が働いていると見ることができる。

35a) 昨日は一食抜いた。

35b) 昨日は朝食を抜いた。

36a) 明日はちゃんと三食食べようと思う。

36b) 明日はちゃんと夕食を食べようと思う。

「朝食」や「夕食」はヲ格でなければならないが、「一食」「三食」では「を」があるとかえって不自然である。また、「食事を一食抜く」のように名詞句を補うことは可能だが、これを連体数量詞文にして「一食の食事を抜く」はかなり冗長で不自然である。

対応する連体数量詞文を持たない遊離数量詞文のうち、**程度差**についても見ておこう。これは、比較を含む構文で、述部は形容詞かいわゆる形容動詞¹¹⁾である。

37) 良樹は三郎より 5 cm 背が高い。

38) 可奈子は小百合より 3 才年上だ。

39) うちのクラスは隣のクラスより 1 人少ない。

比較構文の《程度差》の表示は、英語の比較構文でも同様の現象が見られる。

40) This river is *twenty miles* longer than the Colorado River.

比較とは言っても、「あなたは確か 3 つ年上でしょう」のように「…より」のない場合もある。しかし、これも比較の文であることは変わらず、省略されている「…より」の部分を補うことも可能だ。

以上のうち、対応する連体数量詞文のない遊離数量詞文として、①継続時間、②動作の回数、③変化量、④比較文における程度差、という 4 つの項目は立ててよさそうだ。問題は、「一食抜く」「500 円かかる」のような表現であるが、これは単純に冗長さ・意味的余剰性を回避しているものなのかどうか、もう少し検証が必要である。

10) 話し言葉では、「が」「を」をはじめとする格助詞が現れないことがある。通常の発話では「ねえ、時間かかる？」などは別に不自然でない。これを加藤は**ゼロ助詞**と名付けているが、機会を改めて論じることとし、ここでは扱わない。

11) 単純に「形容動詞」と言っても、その意義的特性は均一ではなく、いくつかの段階が考えられる。詳しくは、Kato (1995) を参照。ここでは多少なりとも段階性 (gradability) を有すると認められるものを広く指す。

2. 4. 数量詞文の文法的評価

数量詞構文に限らず、ある文が文法的に正しいか否かという文法的評価は、人によって異なることがある。文法研究の多くは、文法的に適格な文と不適格な文（あるいはそれに不自然な文を含めることもある）の評価の微妙なところを考察の対象とせざるを得ないことが多い。いきおい研究者によって文の文法的評価が異なることも珍しくなくなる。文法性がどう評価されるべきかについて、社会言語学的な研究の手法を取り入れることで統計などによる公約数的な文法判断を得ることは可能であるが、文法モデルを構築する理論研究の場合それですべてが解決するわけではない。

また、文法性の判断はいわゆる文法の領域だけに限定して行うのが不可能な場合もある。特定の文脈下の発話として想定した場合の評価や言語外の知識を切り放して、ある文の純粋な文法性だけを取り出して評価することは難しいし、ましてや一般の人の評価のデータを収集する場合にはかなり意を用いなければならない¹²⁾。最初から語用論のレベルと統辞論のレベルを分離して評価することは難しいのである。

数量詞文の文法評価が微妙な点の一つに格の制約の問題がある。ガ格やヲ格の名詞句ではそれに対応する遊離数量詞文が作れる¹³⁾が、二格は微妙で、その他の格は原則として不可能とされている。

たとえば、次の文は文法的でない。

41)*学生から5人レポートが出ていない。

これは「学生が5人レポートを出していない」とガ格であれば適格である。しかし、日常の発話では、Q-no-NCタイプなら、数量詞がついているはずの名詞（句）が現れないことも珍しくない。次の「ええ、5人出ていませんね」は非文とは言えないし、加藤は特に不自然と思わない。

42)「学生はもう全員レポートを出しましたか?」「まだですね」「出していないのがいますか」「ええ、5人出ていませんね」

この「5人出ていませんね」は単純に「5人の学生からレポートが出ていませんね」と復元すればすむということではないかもしれない。「5人出していないね」というべきところを言い誤ったが、発話表現としては許容されやすいという可能性も考える必要があるだろう。しかし、「5人出ていませんね」を復元するときに、二格やヲ格は出ないであろう。

12) Smith and Wilson (1979: 31-41) では、一般の話者が常に文法規則の正しい適用を行うわけではないことが述べられている。ページは邦訳書のページ。

13) これらの格が表層の形態格なのか、あるいは意味的な文法格なのかは、ここでは議論しない。また、「対応する遊離数量詞文がつくれる」とは数量詞移動を考える立場で言えば「数量詞を遊離できる」ということになる。

Kuno (1978) は、(43) を完全な非文とすることはできないとする。これには、奥津 (1996b) も触れているが、一般にこの種の文は非文とされることが多い。

43) ?/*友達に四・五人手紙を書いた¹⁴⁾。

これも、「友達」が現れないまま用いられることがある。

44) 「もう友達に手紙書いたの?」「四・五人書いて、面倒になってやめちゃった」

(44) の「四・五人書いて」は文法的に不適格だろうか? あるいは不自然だろうか。日常の発話と想定するとそれほど不自然とは言えないと思われる。同じような例は多く見つかる。

45a) *友達に三人電話をかけた。

45b) 「もう、お友達に電話したの」「三人かけたけど、みんな留守だったよ」

46a) *学生から 10人暑中見舞いをもらった。

46b) 「学生から暑中見舞いは来ましたか?」「10人もらいましたよ」

日常の発話では、数量詞がその数量を表していると考えられる名詞(句)が現れないことも多い。そういった発話の文法性や構造は今回議論しないが、こういった発話に関する知識や判断が、「友達に四・五人手紙を書いた」などの文の判断から完全に排除されているという保証はない。これまで、談話のレベルで発話としての適切さを考慮しつつ、数量詞が論じられることは多くなかった。管見では、情報構造という点から数量詞を論じた大木充(1987)があるくらいのようなのだ。本稿では、こういった観点を大いに取り入れつつ、論じていく。

3. 連体数量詞と遊離数量詞

3. 1. 類別詞のずれ

数量の表示は多様である。一見同じように見えても、次の(47a-b)と(48a-b)は、類別詞の使い方に本質的な違いがある。

47a) 文庫本を 5 冊購入した。

47b) 5 冊の文庫本を購入した。

48a) 北陸道を 480km 走った。(再掲=(28a))

48b) 480km の北陸道を走った。(再掲=(28b))

(47a) と (47b) の意味はほとんど同じであるように感じられる。これに対して、(48a) と (48b) の意味は異なっている。少なくとも北陸自動車道が 480km の長さでなければ、(48b) は事実と反することを伝えていることになるが、(48a) は北陸自動車道の長さには言及していない。むしろ 480km 以上の長さがなければ 480km 走ることはできないが、480km 以上あれば 2000km あろうが、

14) ? は久野, * は加藤による判断。

北陸自動車道そのものの長さは関係がない。つまり、(47a)は(47b)と何らかの関連があると考えられることができるが、(48a)と(48b)の場合そうはいかないのである。この問題は、奥津(1996b)が「属性Q」と「数量Q」と呼んだ対比の一つと考えることができる。

順を追って見ていこう。まず、國広(1980)は、(49a-b)では意味の差はほとんどないように見えるが、(50a-b)では意味の差が出るとした。

49a) 3冊の本を読んだ。

49b) 本を3冊読んだ。

50a) 10段の階段を登った。

50b) 階段を10段登った。

(50a)は階段が総数10段からなるものであると考えられるし、(50b)は総数は10段より多いと考えられる。いわば、「全体的」対「部分的」の対立になっている(國広(1980:16))。このことは、Q-no-NCタイプの連体数量詞文を基底形としてNCQタイプの遊離数量詞文を派生させる数量詞移動操作に対する反証の一つとして捉えることができる。

全体と部分という異なる解釈が(50a)と(50b)の間にあるのはなぜだろうか。(49a)と(49b)ではなぜそういう解釈はなされないのだろうか。(49)における「本」と「3冊」の関係は、本の数量が3であるというものであるのに対し、(50)の「階段」と「10段」の関係は、階段の数量が10というものではない。10の階段があるのではなく、階段を構成する段が10あるということである。これが、全体と部分という異なる解釈を成立させていると考えられる。奥津(1996b)はこの点に着目して、「10段の」は階段の属性を表すものなので「属性Q」と呼び、「3冊の」は本の数量を表すということで「数量Q」と呼んで区別した。

では、(48)の場合はどうだろうか。「階段」そのものは「段」で数えないが、「北陸道」は「km」で数えられるように一見思えるかもしれない。しかし、やはり、「北陸道」は「自動車道」の一つであり、「北陸道」それ自体を「km」で数えることはできない。「北陸道」は固有名詞であり、この世に一つしかないので、数えるということにはふさわしくないが、「km」で数えているのはその長さのほうであり、「北陸道」そのものの数量ではない。そのものの数量とは「いくつあるか」ということであるから、本稿では**存在数量**と呼ぶことにする。奥津の「数量Q」とは、Q自体が数量詞のことなのでやや分かりにくい、つまりは存在数量を表す数量詞のことである。「km」は、「北陸道」の存在数量ではない。「10段の階段」も「480kmの北陸道」も、存在数量を表す数量詞が使われておらず、**類別詞がずれている**ということでは同じである。

3. 2. 存在数量詞と非存在数量詞

前節で見た「存在数量を表す数量詞」を**存在数量詞**とし、そうでないものを一括して**非存在数量詞**と名付けることにすると、類別詞がずれているというのは非存在数量詞が用いられてい

る場合であると定義できる。しかし、存在数量詞か非存在数量詞かは名詞（句）との関係によって決まるので、一概に定義できない。

例えば、長さを表している数量詞、面積を表している数量詞、体積を表している数量詞などは同じような働きをするように思えるが、実態は必ずしもそうではない。

51a) 30メートルの廊下を走る。

51b) 廊下を30メートル走る。

52a) 1.2kmの遊歩道を歩く。

52b) 遊歩道を1.2km歩く。

長さを表す数量詞を用いた(51)(52)は、連体数量詞文と遊離数量詞文とで意味が異なっている。連体数量詞文では、廊下そのものが30メートルあり、遊歩道そのものが1.2kmあり、いわば國広（1980）の言う全体の量が示されている。これに対し、遊離数量詞文では、走った距離が30メートルであり、歩いた距離が1.2kmである。これは、部分に一元的に決まるわけではないが、(51b)は通常、30mより長い廊下を走り、その走った距離が30mであると解釈されるだろう。とは言え、(52b)を「遊歩道を1.2km歩いたところで、小さな湖のほとりに出た」のような文に変えると、遊歩道全体の長さが1.2kmあり、その遊歩道を1.2km全部歩いたということもありうる。つまり、結果的に全体の量に一致する。これは、全体数量が部分数量の真部分集合であることの結果の反映に過ぎないが、本稿では全体と部分という対比は実態にそぐわない面を持つので用いないことにする。長さの数量詞を伴う例文をもう少し見ておこう。

53a) 400mのトラックを走る。

53b) トラックを400m走る。

(53)では、やはり連体数量詞は、トラックが400mトラックであることを表している。(53b)では、トラック全体が何メートルあるかは関係なく、走った場所がトラックで走った距離が400mであることが表されているに過ぎない。端的に言えば、連体数量詞は**長さ**を表しているが、遊離数量詞は**距離**を表しているということになるだろう。つまり、2つの文は意味が異なっている。(51)(52)(53)は、いずれも長さの単位を伴った数量詞が用いられているが、やはり、《類別詞のずれ》の例なのである。「廊下」「遊歩道」「トラック」などは、その存在する個数を数える場合、ひとつ・ふたつ…などとなるであろう¹⁵⁾。その端的な例が、(54)である。

54a) 20cmのろうそくが必要だ。

54b) ???ろうそくが20cm必要だ。

54c) 5本のろうそくが必要だ。

54d) ろうそくが5本必要だ。

15) 「廊下」「遊歩道」は「1本・2本…」と数えてもよいように思うが、ここでは議論しない。

類別詞が存在数量を表さない(54a)と(54b)とでは、全く意味が異なり、通常ろうそくを素材として必要とする場合でも、cmが単位では不自然だ。これに対して、ろうそくの存在個数は「本」で数えるので、(54c)(54d)では類別詞がずれていない。両者の意味はほとんど変わらない(厳密な差異は後で議論する)。以上の例文に関しては、長さは存在数量詞となっていない。

つぎに面積・広さに関しても例文を検証してみよう。

55a) 200平方メートルの畑を耕す。

55b) 畑を200平方メートル耕す。

やはり、両者の意味は異なり、類別詞がずれている。「平方メートル」は、存在数量を表しているのではない。(55b)は耕した量として「200平方メートル」が現れている。畑そのものはもっと広くても構わないのである。

では、体積はどうだろうか。

56a) このバケツには 12リットルの水が入る。

56b) このバケツには水が12リットル入る。

57a) 500ccの牛乳を一気に飲む。

57b) 牛乳を500cc一気に飲む。

これらは、(54c)(54d)の場合と同じで、意味はほとんど同じである。つまり、(56)(57)では体積を表す数量詞が存在数量詞となっているわけである。

以上、この節で見た例文では、長さと面積を表す場合は非存在数量詞となり、体積を表す場合は存在数量詞になっている。非存在数量詞の場合は、連体数量詞と遊離数量詞で明らかに意味が異なっているのであった。そして、存在数量詞の場合は知的意味はほとんど変わらない。次の節では、非存在数量詞を用いた場合の連体数量詞と遊離数量詞の意味の違いを検討する。その後で、再度、長さや面積は必ず非存在数量詞になるのか、また、体積を表す場合は必ず存在数量詞になるのか、について考える。

3. 3. 非存在数量詞における連体と遊離の差異

存在数量を表すとは見なされない数量詞が用いられると、連体数量詞文と遊離数量詞文はその意味を異にする。それは前節で見た通り、長さを表す数量詞の場合に顕著である。(58a)の120mは釣り橋の長さであり、(58b)では歩いた距離、つまり移動距離である。

58a) 120mの釣り橋を歩く。

58b) 釣り橋を120m歩く。

この場合、遊離数量詞は《動作量》を表していると言っていいだろう。これは(59)の面積を表す数量詞にも当てはまる。

59a) 200平方メートルの畑を耕す。(再掲 = (55a))

59b) 畑を200平方メートル耕す。(再掲 = (55b))

(59b) では、耕した量が「200平方メートル」である。非存在数量詞が遊離数量詞として用いられた場合に《動作量》を表すのだとすれば、動作を意味する動詞と無関係ではないはずである。

60a) 120mの釣り橋を渡る。

60b) ???釣り橋を120m渡る。

61a) 120mの釣り橋を渡りきる。

61b) *釣り橋を120m渡りきる。

意味が異なっても「歩く」の場合は(58)のようにいずれでも文が成立するが、「渡る」の場合は、NCQタイプがかなり不自然になる。「渡る」という動詞は、通常二地点間の移動に用いるので、「橋を渡る」と言えば、橋の一端から渡り始めて向こうの端へ至ることを意味する。つまり、「120mの橋を渡る」場合には、移動距離は120mであり、移動距離は橋の長さそのままである。したがって移動距離を《動作量》として表示する意味はない。「*120mの橋を120m渡る」というのは重複を含んでいるし、また、「*120mの橋を200m渡る」ということはあり得ない。「渡る」は一般に、向こうの端へ到着すること、つまり動作の完了を含意するので、(60)のようなペアは成立しないのである。(61)のように「渡りきる」では動作の完了の解釈しかあり得ず、(61b)の遊離数量詞文は明らかに非文となる。ただし、「渡る」は、一定の文脈を与えれば、向こうの端に到着しなくてもよく、その場合には、「渡る」を使った文に遊離数量詞が現れても非文にならない¹⁶⁾。

62) その釣り橋は200mほどの長さがあった。義雄は、その橋を120m渡ったところで、恐くなって引き返した。

この場合は、「渡る」が動作量を表示できる動詞になっているわけである。(60-62)を見ると、「歩く」は動作量が表示できる動詞であり、「渡る」は場合によっては可能だが一般に動作量を表示できない動詞であると言えるだろう。こういったことは、「越える」などについても言える。

63a) 200mの橋を越える。

63b) 橋を200m越える。

同じ「越える」という動詞を用いても、(63a)と(63b)とでは少し意味が異なる。(63a)では、橋の長さが200mであり、その橋を渡りきった時点で「越えた」ということになるが、(63b)では、橋の長さは不明で、渡りきった地点からさらに200mほど進んだところにいることを意味している。(63b)では、「橋」が「越える」という動作の起算地点になっているわけである。

つぎに明らかに遊離数量詞が非文となる例を見ておこう。

16) 「渡る」の意味分析などについては、國広編(1982: 20-28)などを参照。

64a) 可奈子は6畳の勉強部屋を持っている。

64b)*可奈子は勉強部屋を6畳持っている。

65a) 僕は200平米のフロアを掃除した。

65b)*僕はフロアを200平米掃除した。

66a) 159mのビルを建てる。

66b)*ビルを159m建てる。

これらは、動詞そのものが語彙的に《動作量》の表示ができないのではない。どんな数量詞でも動作量を表せるのではなく、動詞ごとに動作量を表す数量詞には制限があると考えべきだ。「建てる量」を長さで表すのはおかしいが、個数でなら表せる。

67a) 3棟のビルを建てる。

67b) ビルを3棟建てる。

むしろ、「個数」を表す数量詞は《存在数量詞》であり、ここで議論している《非存在数量詞》とは意味や機能が異なっている。見方を転じると、(67b)の「3棟」は《動作量》を表すとも解釈できそうだが、このことはあとで議論する。いずれにせよ、《動作量》の表示は動詞に固有の語彙的性質があって左右されたりするのではなく、また数量詞のみによって決まるのでもなく、動詞と数量詞の関係によって決まってくるということは言えるだろう。

このほかに《動作量》の表示は述部の性質にも左右される。このことが端的に現れるのは、アスペクト辞を伴った場合である。本稿で《動作量》と呼んでいるものは、矢澤(1985: 104)で言う「達成量」に相当するが、矢澤はこれを動作・作用の完了時に達成された数量と定義している。いわば結果的に捉えたものであるから、開始や継続のアスペクトとは共起しにくいと言える。

68a) 中央道を100km走る。

68b)*中央道を100km走り始める。

68c)*中央道を100km走り続ける。

68d) 中央道を100km走り終える¹⁷⁾。

(68c)は、習慣として続ける場合であれば特に不自然ではないが、個別動作としての開始や継続として見れば明らかに非文となる。たとえば、次のように文脈を与えて、習慣動作という解釈を確定させると不自然さはかなり減じる。

68e) 高速道路の運転になれるため、その日から毎日中央道を100km走り続けている。

これは、その習慣動作が終わった時点で、100kmという結果が生じるから可能なのである。

17)「中央道」と「100km」にそもそも必然的な関係がないので、単に「走り終える」というだけでは発話上やや適切さを欠く。「僕らは中央道と上信越道を100kmずつ走ることにしていたが、昼前にまず中央道を100km走り終えた」のようにすれば、発話文としても不自然さはかなり軽減される。

理論的には習慣を開始するということも考えられるが、開始のアスペクトでは不自然さが残る。
3f)?高速道路の運転になれるため、その日から毎日中央道を100km走り始めた。

これは、「100km走り始める」の部分の解釈が「100km走ることを始める」となるためで、遊離数量詞の修飾する部分が「走る」だけになっており、構文そのものの構造が異なると考えるべきである。本来は、「高速道路の運転になれるため、その日から毎日中央道を100kmずつ走り始めた」のように言うべきところであるが、「ずつ」の欠落を不自然に感じなければ、とくに表裏として未熟な感じもしないであろう。「…し続ける」でも「ずつ」があるほうがよいが、なくともさほど不自然でないのは、「100km走る」ということを結果として見ても継続とはあまり矛盾しないからだと考えられる。それに比べると、「…始める」という開始のアスペクトは結果とする解釈とはやはり共起しにくいのであろう。

このように、習慣ではない個別的な動作の場合に「走る」や「飲む」が開始や継続のアスペクトを表しながら遊離数量詞を用いにくいことや、習慣的動作の場合に継続のアスペクトでは不自然でなく、開始のアスペクトではやや不自然であることは、結果的に捉えた動作量、すなわち達成量という概念を導入した矢澤（1985）を支持するものと言える。この「達成量」と位置される概念として、矢澤は「同時量」という概念を示している。これは、動作・作用と同時に実現される数量と定義される。矢澤（1985：104）で与えられた例文を見てみよう。

9) 制止の声にもかかわらず酔っぱらった学生が五人橋を渡り続けた。

0) そのライオンは牛肉をいっぺんに500g食べ始めた。

(69)の「五人」は、存在数量詞である。本稿では、存在数量詞と非存在数量詞を分けて議論しているのだから、ここでは扱うべき対象にならない。矢澤（1985）では、(70)は容認される文として示されているが、加藤の判断では不自然な文である。例えば、同じような文で検証してみよう。

1a) ???良樹は、牛乳をいっぺんに500cc飲み始めた。

この文もやはり不自然である。もしも、この文を矢澤が(71b)のような意味に解釈しているのであれば、「…始める」という言い方は不適切であるし、ましてや動作の開始のアスペクトと見なすことができない。

1b) (良樹は牛乳が大好きだ。家に帰ると) まず最初に良樹は、牛乳を一気に500cc飲んだ。そして、さらに、1000ccのパックを1つあけてしまった。)

もしも、(70)のライオンの例が、まず最初に牛肉を500g食べ、さらに肉を食べたという状況を描写するものだとすれば、文としては不適切である¹⁸⁾。また、「いっぺんに」という副詞で、

18) このほかに、「五人」といった人数は中間値を一般に考えない不連続数量であるのに対し、「500g」など重さを表すものは、「499.99g」のような中間値を想定できる連続数量であるという点も関わっていると考えられるが、この点は4.3節で議論する。

《同時量》を表すことが保証されるという考え方もわかりにくい。やはり「500g食べる」というのは、結果的な捉え方であり、いわば「達成量」である。単に、「食べる」時間（動作の継続時間）がきわめて短かっただけのことである。(70)の例文は不適切であり、それはやはり「達成量」を表すからだというのが本稿の結論である。むろん、このことは矢澤（1985）の「達成量」という概念を否定することにはならない。

さて、この節の議論をまとめておこう。非存在数量詞を含む文の場合、遊離数量詞は、動作や状態を結果として捉えた数量（これを《動作量》と称した）を表すと考えられる。しかし、常に遊離数量詞が《動作量》を表すのではなく、述部の性質にも影響を受けることがある。例えば、結果としての数量と捉えることと矛盾するようなアスペクトでは文が成立しにくい。また、遊離数量詞で《動作量》を表示する場合、適切な数量詞と名詞の組み合わせがあり、無制限にどんな名詞と数量詞の組み合わせでも《動作量》の表示が成立するわけではないのである。

3. 4. 連体数量詞文における非存在数量詞の意味

非存在数量詞は、遊離数量詞文で一般に《動作量》を表示するものの、《動作量》の表示そのものがない場合もあるということが分かった。では、非存在数量詞が連体数量詞として用いられた場合どういった役割を果たすのだろうか。

矢澤（1985：97）は、数量詞を遊離し得ないものの例として、次のようなものを挙げた。

72a) 2000ccの車を買いました。

72b)*車を2000cc買いました。

これを、奥津（1996b：102-3）は、「2000cc」は車の属性を表す働きをしているところに注目し、「属性Q」と呼んだ。奥津（ibid.）は次のような例文も挙げ、これも「属性Q」だとする。

73a) おじさんは一二文の足袋をはく。

73b)*おじさんは足袋を一二文はく。

これらの例は我々がこれまで《非存在数量詞》と呼んだものの含まれる。つまり、類別詞がずれているのである。「車」は「台」で、「足袋」は「枚」や「足」などで数える。大きさ・サイズも含むような広い意味で「属性」という用語を定義するのであれば、この分析は非常に有効だと思われる。一般に、属性はその種類・種別を表す目安ともなる。

74) 30cmの定規を買う。

75) 可奈子は、6畳の勉強部屋を持っている。(再掲 (=64a))

76) 400mのトラックを疾走する。

これらは、単に長さや広さを表しているだけでなく、その種類を表してもいる。属性はそのもの固有のもので、ふつう可変的なものではない。この点で《動作量》という概念とも相容れない。また、前節で見たように、動作量が結果的な捉え方をしているのに対し、固有の属性と

は結果として捉えたものではない。これらのことは、属性を表す連体数量詞を用いた文に対応する遊離数量詞文が不適格となることと合致している。

以上のことから、非存在数量詞は一般に、遊離数量詞文で《動作量》を表し、連体数量詞文で《属性》を表すとまとめることができる。次節では、再度、長さや面積は必ず非存在数量詞になるのか、また、体積を表す場合は必ず存在数量詞になるのか、について検証する。

3. 5. 存在するものの数量表示

先に3.2.節で見た例文では、長さや面積を表す数量詞は存在数量詞にならなかった。しかし、例外がないわけではない。特に、面積に関しては存在数量詞と見るべきものも少なくない。

77a) その事業には10haの用地が必要だ。

77b) その事業には用地が10ha必要だ。

(77a)と(77b)では知的意味がほとんど変わらない。(77)が「用地」が存在することを表しているわけではないが、必要とされる用地はいずれにせよ10haあるということは(77a)(77b)とも変わらない。つまり、こう考えると「10ha」は存在数量詞と認められるわけである。しかし、以下のような例文は(77)のように簡単に判断することができない。

78a) 宅地造成が進み、3.5haの住宅地が完成した。

78b) 宅地造成が進み、住宅地が3.5ha完成した。

79a) 10haの山林が焼失した。

79b) 山林が10ha焼失した。

(78)では、造成され完成している住宅地の広さは3.5haで変わらない。しかし、(78a)ではひとまず「3.5haの住宅地」が完成しているのに対して、(78b)では「住宅地」の完成した部分は3.5haだけで、まだ未完成の部分があるとも解釈できる。あるいは、全部完成して3.5haなのかもしれないが、こう考えると(78a)と全く同じ文意味を(78b)が持っているとは言いにくくなる。(79)も焼失した山林の面積が10haであるという点では同じであるが、連体数量詞文と遊離数量詞文が全く同義だとは言いにくい。(79a)は普通に読めば、「10haの山林」がもともとあって、それが全部山火事で焼失したと解釈できる。(79b)はそもそも山林がどれだけあったのかは不明で火事で燃えた面積は10haだが、まだ燃えずに残っている山林があるのかもしれない。しかし、これらはそれぞれが逆の意味を表すことが許される¹⁹⁾。

79c) その村では、村の山林の3分の2にあたる10haの山林が焼失した。

79d) その村では、先日の山火事で山林が10ha焼失した。これで村の山林はすべて失われ、林業に頼ってきた村人は大きな打撃を受けている。

19) (79d)は「その村は…山林を10ha焼失した」のように、「焼失する」を他動詞で使う方が自然だが、ここでは自動詞のまま比較する。

全く同義だとは言えないにせよ、明確に異義が生じているわけでもない。文脈によって解釈がかなり影響を受けることがあると見るのが妥当だろう。(78a-b) (79a-b) は、存在数量詞が用いられていると見なさざるを得ない。同義性についてはあとで別の角度から分析し直す。さて、(78) (79) とはやや異なる (80) も見ておこう。

80a) 5000平方キロメートルの国土を失った。

80b) 国土を5000平方キロメートル失った。

これも (79) と変わらないように見えるが、やはり遊離数量詞文では、全体量という解釈よりも、その一部（部分量）という解釈の方が成り立ちやすく、(80d) はやや不自然になる。

80c) その国は5000平方キロメートルの国土を失い、事実上消滅した。

80d)?その国は国土を5000平方キロメートル失い、事実上消滅した。

その一方で、連体数量詞文では、必ずしも「全体の量」を意味しなくてもよい。

80e) その国は 5000平方キロメートルの国土を失ったが、まだ広大な国土が残っている。

80f) その国は国土を5000平方キロメートル失ったが、まだ広大な国土が残っている。

(80) でも「5000平方キロメートル」は存在数量詞として機能しているとするべきではあるが、そのことを立証するには連体数量詞文と遊離数量詞文の同義性をどう設定するのかを明確にしておく必要がある。というのも、存在数量詞の認定は、数量詞と名詞（句）の意味的關係によって判別できるものの、Q-no-NC タイプと NCQ タイプで意味の違いが出るかという点に注目して分類するのも一つの方法だからだ。両者の差異はいくつかのレベルで整理しつつ分析する必要があるので、第4章で扱う。

ここで、長さについても見ておこう。先に見たように通例長さを表す数量詞は、存在数量詞にはならない。

81a) 150cmのビニールひもが必要だ。

81b) ビニールひもが150cm必要だ。

「ビニールひも」の存在個数を数える場合の類別詞は通例「本」である。(81a) では、本数は分からないが長さ150cmのビニールひもが必要とされている。150cmはむろん50cmを3本ではだめだろう。(81b) は全部で150cmあればよいということなので、150cmが1本あれば十分だろう。また、場合によっては30cmが5本で合計150cm あるということでもいいのかもしれない。結局、両者はやや文意味が異なっており、150cmは存在数量詞ではないと見なされる。しかし、同じような構造の文でも (82) は微妙である。

82a) 5メートルの白線を引く。

82b) 白線を5メートル引く。

「白線」もやはり、存在個数は「本」で数える。(82a) も (82b) も結果的に、長さ5メートルの白線が引かれるという点では共通している。この場合、1メートルの白線が5本あるという

ことはいずれも考えられない。この点では(81)の場合よりも両者の意味は近いと言えるだろう。この点では、「5メートル」を存在数量詞と認められないこともなさそうだ。しかし、両者の意味が全く同じということではない。遊離数量詞文では、数量詞が《動作量》を表していると考えられるところがある。

83a) 5メートルの白線を消した。

83b) 白線を5メートル消した。

「引く」ではなく「消す」を用いた(83)では意味の差が出る。(83a)では、そもそも「5メートルの白線」があり、それ自体を消したのであり、白線は全体的に消されている。(83b)では、そもそも白線は何メートルあるか分からないが、消した量が5メートルということである。(83b)では、まだ白線の消されていない部分が残っていないように解釈することができる。つまり、(83)では「5メートル」は存在数量詞になっていない。先に見たように、非存在数量詞が遊離数量詞として用いられると《動作量》を表すが、(83b)もこの原則をそのまま適用できる。(82)も同様に考えるべきだろう。述部が異なるので、(83)を以てそのまま(82)の数量詞の性質決定の根拠にはできないが、「引いた量」が「5メートル」という考えは十分に成り立つ。

長さを表す数量詞は、微妙なものや紛らわしいものもあるが、いずれも非存在数量詞に分類することができるものばかりである。管見では、非存在数量詞に分類できない例を見つけることができなかった。長さを表す数量詞が存在数量を表さないというのは、我々の世界における物質的な存在がすなわち三次元的な存在であるということと関わっていると考えられる。広さ・面積を表すものは、存在数量に解釈できるものがあるが、存在数量に解釈できないものもあった。体積を表す数量詞は、原則的に存在数量を表すが、これはやはり三次元的な単位だからであろう。

重量を表すものも体積を表すものに準ずるので、存在数量詞と考えられるが、こういった数量詞が存在数量詞として機能しなくなることもある。このことは、4.3.節で扱う。

4. 2つの数量詞文の同義性

これまでの議論では、数量詞を存在数量詞か非存在数量詞かという観点で捉え、非存在数量詞は遊離数量詞として用いられると《動作量》を表示し、連体数量詞文では《属性》を表示するという仮説を検証した。

しかし、存在数量詞が使われている場合、連体数量詞文と遊離数量詞文は、その知的意味が「ほとんど同じである」、あるいは、「変わらない」ものとして扱ってきた。

84a) 三台の車が駐車場に入ってきた。

84b) 車が三台駐車場に入ってきた。

これまでの数量詞をめぐる考察の多くでも、これらは「知的意味は変わらない」といった扱いを受けてきたようである。しかし、存在数量詞文も、名詞句が《定》であれば、Q-no-NCとNCQとの間で意味の違いが明確になる。奥津（1996b）は、Muraki（1974）のあげた次のような例文を引いている。

85a) その三本の鉛筆を下さい。

85b) その鉛筆を三本下さい。

奥津（ibid.）は、数量詞移動を認める立場から、基底形をNQCとすることと、名詞句の定・不定を区別することを主張している。確かに、(85)は「鉛筆」が定名詞句になっており、二つの文の意味そのものが異なっている。では、これに対して、(84)のような不定名詞句を用いた文では、二つの文の意味が同じなのだろうか。本稿では、(84)の二つの文には意味の違いがあると考え。その違いとは、談話のレベルで明確になるものであり、話者の認知と知識を反映した結果である。この章では、まず二文の違いについて論じる。そして、実際の言語運用の場を想定すると連体数量詞文と遊離数量詞文が明らかに異なることを示す。そのあとで、その違いが実は、文意味（sentence meaning）²⁰⁾としても確認できることを示す。つまり、談話のレベルで明確になる差異とは発話意味（utterance meaning）違いのことであるが、それは、文意味に由来するものだと考える。本稿は、数量詞移動を否定するための議論はしないが、文意味が異なるということは、そのまま数量詞移動を設定しない²¹⁾という結論に結びつくことになる。

4. 1. 離散的認知と集合的認知

次の文はいずれも同じような意味を持っているように見える。

86a) 私は2つの消しゴムを買った。

86b) 私は消しゴムを2つ買った。

「私は消しゴムを買った」のであり、その個数は「2つ」である。それは、(86a)も(86b)も変わらない。しかし、文具店に買い物に行った場合、連体数量詞文を用いた(87a)は明らかに不自然な発話となる²²⁾。

87a)*「2つの消しゴムを下さい」

20) 「文意味 (sentence meaning)」と「発話意味 (utterance meaning)」の区別は、近年の談話研究では一般的である。Blakemore (1992: 5) などを参照されたい。

21) この場合の数量詞移動はQ-no-NCからNCQへの派生を考える数量詞移動のことである。つまり、本稿で言う連体数量詞文から遊離数量詞文を派生する規則のことであり、奥津（1969）、奥津（1996a）、奥津（1996b）などで言うNQCからNCQを派生する規則は含まれない。

22) 特定の状況・文脈での発話を表すために、例文に「」を付して談話レベルでの分析であることを示す。この場合のアスタリスクや疑問符などは、発話としての適切性・自然さに関する判断を示すものである。

87b)「消しゴムを2つ下さい」

また、青果店に行って、(88a)のように言うのもおかしい。

88a)*「5個のリンゴがほしいんですが」

88b)「リンゴが5個ほしいんですが」

(87)も(88)も名詞句が《不定》である点では同じであるはずだ。しかし、発話意味としてはいずれも、遊離数量詞文のみ適格で連体数量詞文は不適格なのである。両者の間には、文体的な差も感じられるかもしれない。つまり、話し言葉としては「…個のリンゴを」よりも「リンゴを…個」のほうが自然であり、口語の文体としてより適切であるという判断もあり得るだろう。「文体的な差」というのは、従来文法論ではあまり扱われなかったが、談話レベルの分析を行い、発話意味の異同を論じるのであれば、文体差を無視することはできない。結論から言うと、ある種の文体差はあるのだが、それは本質的なものではなくて、発話意味がその種の違いを導き出していると本稿は考える。このことは4.3節で、具体的に論じる。

連体数量詞文が話し言葉では使われにくいという直観があったとしてもそれは無意味でないが、次のような例では特に不自然とは言えないだろう。

89a)「池袋から日本橋に行くのは大変かな?」「大変じゃないよ。二本の地下鉄を乗り続けば行けるよ」

89b)「池袋から日本橋に行くのは大変かな?」「大変じゃないよ。地下鉄を二本乗り続けば行けるよ」

どちらかと言えば、(89b)のほうが自然で、(89a)はやや硬い言い方に感じられるということはあるかもしれない。しかし、(89a)は、さっきの(87a)や(88a)に比べてみると自然な発話として成り立つと言えるだろう。少なくとも不適格な文ということはない。文体の違いが決定的なものになっていると言うことはできないのである。

では、談話のレベルでは遊離数量詞文は常に適格なのだろうか?

90a) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、二台のパソコンが突然故障した。

90b) 私の研究室にはパソコンが二台ある。*今朝、パソコンが二台突然故障した。

(90)のように、遊離数量詞文が不自然な場合もある。実は、この文の「パソコン」は実質的には定名詞句になっており、(90a)はこのままではやや不自然である。そこで、つぎのように「その」をつけると連体数量詞文はずっと自然になる。しかし、遊離数量詞文は不適格なままである²³⁾。

90c) 私の研究室にはパソコンが二台ある。今朝、その二台のパソコンが突然故障した。

90d) 私の研究室にはパソコンが二台ある。*今朝、そのパソコンが二台突然故障した。

23) 遊離数量詞文は「そのパソコンが二台とも」のように全称数量であることを表す「とも」を用いれば、適格な文である。ここでは、数量詞にいわゆる副助詞がついた形は議論の対象にしない。

ここにはこういった規則が働いているのだろうか。実は、さきほどの例文で不適格な発話とした(88a)もある具体的な状況を設定すれば適格になり、その場合は逆に遊離数量詞文が不適格となる。

- 91) 【設定：青果店に行くと、「リンゴ2個300円」「リンゴ5個600円」のようにパックされてリンゴが売られている】「5つのリンゴがほしいんですが」

この状況では5個パックのリンゴを買おうとしていると解釈され、不適格とならない。逆に、5個パックのリンゴを買おうとしているのに、「リンゴが5個欲しいんですが」という遊離数量詞文を使うと不自然である。青果店の人は、ばら売りのリンゴを5つ欲しいのか、あるいは5個パックのリンゴが置いてあることを見ずにそういつているのか、など考えるであろう。(92)のように、店の人が客の発話の意味を理解できないで聞き返すということはあるだろう。つまり、この発話は5個パックのリンゴを指して言うには不適格なのである。むろん、ばら売りのものを指しているのであれば一貫していることになる。

- 92) 【設定：青果店に行くと、「リンゴ2個300円」「リンゴ5個600円」のようにパックされてリンゴが売られている】

客「リンゴが5個欲しいんですが」

店の人「この5個パックのじゃなくて、あっちのひとつ 200円のを5つですか」

客「そうそう。あっちのリンゴを5つね」

このことは、連体数量詞が一種の集合として捉えられた「5個のリンゴ」を指すのに対し、遊離数量詞はまとまりあるものと見なされていないリンゴの個数が5個であることを表していることと本質的な連関を持っている。つまり、連体数量詞が使われる場合は「まとまりのあるもの」と見なしているのであり、そうでない場合は遊離数量詞が用いられると一般化できる。「まとまりのあるものと見なす」には、それが談話の運用上適切でなければならない。

談話の運用には、話者のものの捉え方が反映する。それが、体系的な規則として機能すれば、文法組織に組み込まれることになる。具体的には、Kato (1995)などを参照されたい。このことは単純化して言えば、認知が文法の組織化にかかわるということであり、近年盛んな認知文法のアプローチはこのことを前提にしている。ものの集合を有機的連関があるものととらえるかどうかは、まとまった単位として見るかどうかということであり、むろん認知上重要なことである。例えば、Lakoff(1987:440-442)は、イメージ・スキーマの変化について論じた中で、multi-plex schema と mass schema の間でのスキーマの変化を示している。

- 93a) The wine *spilled* out over the table.

- 93b) The fans *spilled* out over the field.

本来 fans は人間という個体が集まったものであるが、(93b)では連続的な存在のように扱われている。(93b)の the fans が、液体と同じような捉え方をされるのは、fans という集合をひ

とつの有機的連関のある集合の単位と見なすことができるからである。全国に散らばっているようなファンではなく、ある場所にいるファンを単位として捉えるからこそ、(93b)は可能なのである。前者のようなファンであれば、spill outするとは表現できない。

本稿では、有機的連関のある集合と捉える認知の仕方を**集合的認知**と呼び、有機的連関性を持たない複数の（あるいは一定量の）存在と見る捉え方を**離散的認知**と呼ぶことにする。

存在数量詞の文法規則がこの種の認知を反映するというのが、この章の主張の中核である。具体的には、次の四つの主張を行う。これを仮説として提示し、以下で検証していくことにする。

94) 談話における連体数量詞文規則についての仮説

[1] 連体数量詞文は集合的認知を反映する。

[2] 集合的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位と見なすだけの根拠が共有知識に存在しなければならず、その根拠が共有知識にないときは、根拠が提示されなければならない。

この規則に対応する規則が遊離数量詞文にも仮説として設定できる。

95) 談話における遊離数量詞文規則についての仮説

[1] 遊離数量詞文は離散的認知を反映する。

[2] 離散的認知が行われていることを示すには、その集合をひとつの単位と見なすだけの根拠（集合的認知の根拠）が共有知識に排他的に存在してはならない。

リンゴの例で言えば、「5個のリンゴ」という連体数量詞を用いた表現は、それが単位として言及できるまとまりと捉えられていることを表すのであり、その認知の根拠は青果店の店先に5個パックのリンゴが売られていることを発話者たる客が目撃することによって、対話者の共有知識の中に存在していることになる。(87)の場合には、「2つの消しゴム」という集合的認知の根拠が共有知識に存在しておらず、かつ提示もされていない。よって、連体数量詞文は不適格となるわけである。(89)では、(89a)の連体数量詞文よりも(89b)の遊離数量詞文が自然であるが、連体数量詞文も不適格ではないという判断を示した。この発話では、「二本の地下鉄」は具体的に明示されていない。したがって、共有知識には集合的認知の根拠は存在しないのであり、故に離散的認知が成り立つ。しかし、連体数量詞文も成立しうるのは、集合的認知の根拠を提示する可能性があるからである。(89a)は、続けて集合的認知の根拠を示す必要がある。示さなければ、その発話が不適格にならないように、根拠の提示が求められることになる。つ

まり、(89a)は(96a)あるいは(96b)のいずれかとして談話が展開してことになるはずだ。

96a)「池袋から日本橋に行くのは大変かな?」「大変じゃないよ。二本の地下鉄を乗り継げば行けるよ。丸の内線から東西線か、有楽町線から銀座線か、どっちかね…」

96b)「池袋から日本橋に行くのは大変かな?」「大変じゃないよ。二本の地下鉄を乗り継げば行けるよ」「えっ?二本の地下鉄って?」「ああ、丸の内線から東西線か、有楽町線から銀座線か、どっちか乗り継げばいいんだよ」

これに対して、(90)の例では、直前で集合的認知の根拠が与えられるので、明らかに共有知識に根拠が存在していることになる。よって、遊離数量詞文が不適格なのである。

ただし、この種の分析の難しさの一端は談話の単位をどう設定するかが不確定なところにある。例えば、文脈のない状態で比べると、文意味としては(97a)と(97b)に明確な差を見つけるのは難しい。

97a) むかしむかし、ある村に三匹の子豚がいました。

97b) むかしむかし、ある村に子豚が三匹いました。

しかし、テキストのなかで捉えると、さきほどの(94)(95)の規則が適用される。つまり、これらが物語の冒頭の一文だとすると、まだ共有知識はないので、(97a)の連体数量詞文では集合的認知の根拠が示されなければならない。

98a) むかしむかし、ある村に三匹の子豚がいました。その三匹は兄弟でした。一番上のお兄さん
豚はわらで家をつくりはじめました。…

98b) むかしむかし、ある村に三匹の子豚がいました。その村には、小さな川が流れ、村はずれに
は森がありました。

(98a)は、「三匹の豚」が「兄弟」であるという情報が供給され、それによって集合的認知の根拠が提示されたことになるので、問題ない。しかし、(98b)では集合的認知の根拠が与えられていない。(98b)がこれだけで終わるテキストのだとしたら、連体数量詞文は不適格である。しかし、この後も物語が展開していくのであれば、その中で集合的認知の根拠が示されるかもしれない。文学作品の場合には、連体数量詞によって集合的認知であることだけを提示し、すぐにその根拠を与えないこともありうるであろう。

99) 私は、二つの消しゴムがどうしても欲しかった。

この文は、この文を含むテキスト全体が「しかし、手に入らなかった」という文で終われば不適格である。「二つの消しゴム」がなんだか分からないまま、つまり、共有知識に集合的認知の根拠が与えられないままだからである。しかし、(99)がなにかの小説や随筆の冒頭の一文であるとすれば、その文学テキストが完結するまでに集合的認知の根拠が与えられればよい。逆に、すぐに根拠を示さずに、読者に「二つの消しゴムとはどういうものなんだろう」と思わせ、

興味を引きつけながら展開させていくという作者の戦略は十分あり得るし、それは文学作品ではよく行われる手法の一つでもあろう。

では、なぜ連体数量詞文も遊離数量詞文も同じように成り立つことが決して少なくないのだろうか。

100a) 三台の車が駐車場に入ってきた。(再掲 (=84a))

100b) 車が三台駐車場に入ってきた。(再掲 (=84b))

話者がどのように集合的な認知を行うか、また、どういった根拠が与えられるかに制限はない。ただ、集合的認知が成り立てばいいわけであり、そういう根拠であればいいのである。「短時間に連続して入ってきた三台」という集合的認知でもよければ、「私がそこにいた間に入ってきた三台」でもよい。あるいは、ただ単に「駐車場に入ってきた三台」でも構わない。ほとんどの場合、何らかの形で集合的認知の根拠を与えることは可能であろう。問題は、集合的認知が行われた場合、その根拠が存在するものとして発話が一貫していなければならないということである。通常の発話では、新規の情報として導入されれば、集合的認知の根拠を同時に提示するのが難しい場合もある。

101a) 「昨日、何してた?」???「本屋に行って二冊の本を買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

101b) 「昨日、何してた?」「本屋に行って本を二冊買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

上の二つの発話を比べてみると、(101a)の連体数量詞文は不自然である。「本屋で買う二冊の本」というだけでは、十分な集合的認知の根拠にならないのである。それなら、(101b)のように離散的認知のままにしておくほうが自然な発話となる。しかし、十分な集合的認知の根拠となりうるような情報が提示されれば、不適格ではない。

101c) 「昨日、何してた?」「本屋に行って、前から欲しかった二冊の本を買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

談話の構造という観点では、明らかに連体数量詞のほうが有標である。共有知識の中で集合的認知が確立していない限り、離散的認知のまま問題がない。つまり、そのまま遊離数量詞文を使っておけばよい。(101c)も、本を買った方の話者は集合的認知の根拠が十分あると思っているが、質問した人は根拠が十分にあるとは思わないかもしれない。だから、(101d)のままでもこれは成立する。

101d) 「昨日、何してた?」「本屋に行って、前から欲しかった本を二冊買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

これに対して、(102)のように長期記憶のなかに共有知識として集合的認知の根拠が存在している場合は、連体数量詞文のほうが自然である。

102a)「昨日、何してた?」「本屋に行って、君がこないだ教えてくれた、あの二冊の本を買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

102b)「昨日、何してた?」*「本屋に行って、君がこないだ教えてくれた、あの本を二冊買って、それから家でテレビ見ながらごろごろしてた」

新情報で、長期記憶にそれに関する共有知識がない場合には、離散的認知となる遊離数量詞文を用いるのが unmarked な言語運用ということになる。

4. 2. 定名詞句と集合的認知

前節でまとめた集合的認知と離散的認知の反映の違いは、発話意味として見たときに明確に現れる。しかし、文意味としては、文体やニュアンスの違い以外の明瞭な意味の異なりを認めがたい。それでも、文意味に違いが現れる場合がある。「その」など指示詞などを伴い、《定》の名詞句となっているときである。

103a) その三本の鉛筆を買う。

103b) その鉛筆を三本買う。

連体数量詞のついた「三本の鉛筆」の「その」をつけると、「その」は集合的認知も含めて定名詞句化する。これに対し、(103b)のような遊離数量詞文では、「その」は当然「鉛筆」しか指定せず、離散的認知には関わらない。前者は、集合的認知の根拠が必要であるという点では、《不定》の名詞句と変わらない。後者は、意味上、指定されるのは種類であるから、この世の一つしかないような唯一存在物と解釈されてはいけない。

104a) その x 個の Y が／を…

104b) その Y が／を x 個…

従って、(104a)は「 x 個の Y 」の集合的認知の根拠のないテキストや談話では不適格となるし、また、(104b)は「その Y 」が固有名詞に置換可能な唯一存在と解釈されると文意味のレベルで不適格となる。

105) その文具店には十本しか鉛筆がなかった。*私はその三本の鉛筆を買った。

106)*その人を三人呼んだ。

(94)では「その人」が特定の一人の人物を指すと解釈するのが普通なので不適格になる。このように、数量詞の集合的認知と離散的認知は文意味のレベルにも関わっており、単純に談話文法としてのみ分析すればよいわけではない。

4. 3. 連続数量と非連続数量

集合的認知や離散的認知という観点が存在数量詞の分析に有効であることは前節までで示したと思うが、これは非存在数量詞には全く無関係なのだろうか。

107a) 1 リットルの水を飲む。

107b) 水を1 リットル飲む。

一般に体積は存在数量を表すと考えられるが、これにもある程度集合的認知や離散的認知が反映すると見てよいようだ。(107)をそれぞれ未完了文にしてみよう。

108a) まだ1 リットルの水を飲んでいない。

108b) まだ水を1 リットル飲んでいない。

連体数量詞文の(108a)では、「1 リットルの水」というもの（たとえば、1 リットルのボトル入りの水）などが存在し、それを全く飲んでいないあるいは全部飲みきっていないといった意味に解釈できる。(108b)は飲んだ量が1 リットルにまだ達しないという解釈が一般的であろう。(108)では、それぞれが集合的認知、離散的認知を反映していると読むことができるわけであるが、これは前節までで見たように明確な違いとは言にくい。

109a) 【設定：2 リットルのペットボトル入りのウーロン茶を買ってくるように家族に頼む】

「2 リットルのウーロン茶を買ってきてちょうだい」

109b) 【設定：2 リットルのペットボトル入りのウーロン茶を買ってくるように家族に頼む】

？「ウーロン茶を2 リットル買ってきてちょうだい」

(109)では、意図することを伝えるには連体数量詞文の方がより適切ではあるが、(109b)の遊離数量詞文を完全な不適格文だとは断じにくい。ただし、遊離数量詞文だと「はかり売り」をしているように感じられる。(110)の場合は、はかり売りなので遊離数量詞文は適切な発話である。

110a) 【設定：家族に牛挽き肉を買ってくるよう頼む。買ってきて欲しい量は500g】

* 「500gの牛挽き肉を買ってきてちょうだい」

110b) 【設定：家族に牛挽き肉を買ってくるよう頼む。買ってきて欲しい量は500g】

「牛挽き肉を500g買ってきてちょうだい」

この場合、連体数量詞文が不適切なのは(88a)が不適格であったのと同じ理由による。つまり、「500gの牛挽き肉」というパックか何かがあれば別だが、そうでなければ集合的認知の根拠が示されないことになるからだ。この場合、重さを表す「500g」という数量詞は、存在数量詞として機能していると見ることができる。しかし、次のような例では、属性を表す連体数量詞文の用法に近い。

111a) 「200gのステーキ肉を買ってきてちょうだい」

ステーキ肉の存在数量は「枚」で数えることもできるが、次のように「枚」を含む数量詞が加わった(111b)も文法的に適格な文である。

111b) 「200g のステーキ肉を 3枚買ってきてちょうだい」

《属性》と《集合的認知》は一見全く別のことのようには見えなくもないが、そのもの（物質）

の集合上の単位は一種の《属性》と見ることもできる。特に、(111b)における「200g」などは本稿における《属性》の定義から逸脱しない。

このように数量詞が2つある文を見てみよう。

112a) 30cmのビニールひもを5本買った。

112b) 5本の30cmのビニールひもを買った。

112c)*30cmの5本のビニールひもを買った。

112d)*5本のビニールひもを30cm買った。

112e)*ビニールひもを5本30cm買った

112f)*ビニールひもを30cm 5本買った。

113a) 2リットルのウーロン茶が10本届いた。

113b) 10本の2リットルのウーロン茶が届いた。

113c)*2リットルの10本のウーロン茶が届いた。

113d)*10本のウーロン茶が2リットル届いた。

113e)*ウーロン茶が10本2リットル届いた。

113f)*ウーロン茶が2リットル10本届いた。

上の(112a)(112b)(113a)(113b)など容認される文を見る限り、やはり「30cm」や「2リットル」は《属性》と見なすことが可能である。しかし、集合的認知によるまとまった単位と見なすこともできる。つまり、存在数量とも非存在数量とも見なしうる。これに対して、「5本」「10本」は明らかに存在数量である。この2種類の数量詞の違いは、前者が連続的な量として表示するのに対し、後者が不連続な数として個別の存在個数を表しているというところにある。便宜的に、前者が**連続数量**を、後者が**不連続数量**を表すという対比をすると、両者の組み合わせには、(112)(113)に見たようにかなり明確な制限がある。2つとも遊離数量詞として用いた場合はいずれの順序でも非文である。一方が遊離数量詞、他方が連体数量詞という組み合わせでは、連体数量詞が連続数量を表示し、遊離数量詞が不連続数量を表示するという組み合わせのみが文法的な文となり、この組み合わせが最も自然である。両者が連体数量詞になる場合は、不連続数量・連続数量という順序でなければならないが、これは決して自然な表現ではない。また、注意すべきは、不連続数量を表す数量詞はそのまま存在数量詞になっているが、連続数量を表す数量詞は非存在数量詞と解釈でき、《属性》を表す機能を持っていると考えることができるが一方で《集合的認知》がなされているとも考えうるということである。

先に、非存在数量詞か存在数量詞かを検討した体積・面積や重さなどはいずれも、連続数量を表している。体積や重さなどを表す数量詞は一般に存在数量詞となるとしたが、これらは不連続数量を表す存在数量詞と共に起す場合は、非存在数量詞に近い性質を有するのだと考えればよい。ひとつの名詞句について存在数量詞が2種類ある必要はないし、それはときに意味的

な混乱を惹起する。つまり、存在数量詞にもプライオリティがあるのである。

つまり、2つの数量詞が現れる場合は、原則として不連続数量を表す存在数量詞と連続数量を表す非存在数量詞という組み合わせになる。体積のように、連続数量を表す数量詞の中には存在数量詞になりうるものもあるが、こういう場合は強制的に非存在数量詞と解釈される。

5. まとめ

本稿での主要な関心はQ-no-NCタイプの文とNCQタイプの文の意味や機能の違いであった。前者を連体数量詞文、後者を遊離数量詞文などと呼び、いくつかの観点で分類・対照して分析してきた。

数量詞と一口に言っても、その実態はきわめて多様である。少なくとも特定数量詞・不特定数量詞という区分は立てねばならない。また、分析の際に数量詞に助詞などがついたもの（本稿では「数量詞句」と呼んで区別した）を同じレベルで持ち出すべきではない。特定数量詞も典型的な「数詞＋類別詞」というかたちだけでなく、類別詞を欠く場合もある。

2.3.節では、そもそも遊離数量詞としてしか現れない数量詞を、意味の観点から、①継続時間、②動作の回数、③変化量、④比較文における程度差として分類した。このほかにも「2万円かかる」のような費用・金額表現でも、連体数量詞文は現れにくい。こういった基本的な部分は、奥津（1969）が扱っているものもあるが、実はそれほど研究が多くない。今後、もっと掘り下げ、整理して行かねばならない。

さて、第3章と第4章では、数量詞の分析に有効と考えられる分析装置をいくつか提案した。まず、そのものの自体の存在個数を表す存在数量詞と存在個数を表すのではない非存在数量詞という対比を導入した。非存在数量詞では、そもそも存在の数量を表すわけではないので類別詞がずれている。長さ・面積などは非存在数量詞として機能することが多く、体積・重さなどは存在数量詞と見るべき場合が多いが、これらは截然と区別しにくいものもある。これらが、連体数量詞文と遊離数量詞文でどういう意味や機能の違いを持つかということは、簡単におおまかな表にすると次のようになる。

非存在数量詞	連体数量詞	《属性》を表す
	遊離数量詞	《動作量》を表す
存在数量詞	連体数量詞	《集合的認知》を表す
	遊離数量詞	《離散的認知》を表す

非存在数量詞を用いた文の違いは、文意味で明らかなものであり、両者の間に単純な数量詞

の移動変形などを想定するのは難しい。《属性》という分析は奥津敬一郎（1996b）の分析であり，《動作量》という分析は矢澤真人（1985）の示した分析である。両者を二項対置的に設定したのは加藤であり，細部に違いはあるものの，この2つの概念は先行研究に負うところが大きい。ある意味ではこれらの先行研究の妥当性を追検証した形になったとも言えるだろう。存在数量詞の《集合的認知》と《離散的認知》という対比的分析は，本稿で新たに提案したものである。この差は，発話意味で鮮明になるが，文意味の違いと見なすことができるというのが本稿の考え方である。

しかし，存在数量詞と非存在数量詞は連続的に考えなければならない面がある。初めから存在数量詞と考えてよいものもある一方で，どういうものに関する数量を表すかで評価を変えねばならないものもある。体積や重さなどがそれにあたるが，これらは「1個」「2本」などの個別の個数を表すものと異なり，連続的な数量表示を行う。対応関係を整理すると以下になるだろう。

存在数量詞		非存在数量詞
不連続数量表す	連続数量表す	
「…個・…本」等	体積・面積・長さ	

2つの数量詞が現れる文では，存在数量詞と非存在数量詞という組み合わせになる。この場合，存在数量詞と解釈されやすい方から，存在数量詞となる。この場合の数量詞構文は，存在数量詞をEQと表し，非存在数量詞をNQのように表すと，(114)の形になる。また，(114)に比べるとやや不自然であるが(115)の形も容認される。

114) NQ-no-NC...EQ... (EQが遊離数量詞になる形)

115) EQ-no-NQ-no-NC

つまり，EQとNQには解釈に優位の序列が存在すると考えられる。その序列を決定する条件はもっと精密に記述されねばならないが，それは機会を改めて考察することにしたい。また，数量詞における《集合的認知》と《離散的認知》の対比は，発話意味においては，遊離数量詞のほうがいわばunmarkedであるという考えと結びつく。とすれば，数量詞移動の仮説を立てる場合，連体数量詞文がその基底形で遊離数量詞文を派生形とすることが多いが，その逆の遊離数量詞文を基底形とする仮説を検証することは無意味ではないだろう。遊離数量詞文から連体数量詞文が数量詞移動によって派生されるというのは考えにくいかもしれないが，談話においてデフォルトと設定される遊離数量詞文が，本稿で示した以外のこういった要因や条件で連体数量詞文として現れるのかということは論じる価値がありそうである。これも機会を改めて論じたい。

参考文献

- 井上和子 (1983) 『日本語の文法規則』(大修館書店・東京・268p. + x)
- 大木 充 (1987) 「日本語の遊離数量詞の談話機能について」(『視聴覚外国語研究』第10号 大阪外国語大学 pp.37-67)
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」(『日本語教育』一四号 pp.42-61)
- 奥津敬一郎 (1986a) 「連体即連用? 第3回 数量詞移動 その一」(『日本語学』VOL.15-1 明治書院 pp.112-119)
- 奥津敬一郎 (1986b) 「連体即連用? 第4回 数量詞移動 その二」(『日本語学』VOL.15-2 明治書院 pp.95-105)
- 加藤重広 (1996) 「言語の体系性 - 動的言語観と静的言語観 -」(『東京大学言語学論集 VOL.15』 東京大学言語学研究室 pp.351-368)
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックス」(『月刊言語』VOL.6-8 大修館書店)
- 國広哲弥 (1980) 「総説」(『日英語比較講座 第二巻 文法』大修館書店)
- 國広哲弥編 (1982) 『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』(平凡社選書 73 國広哲弥・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子著 平凡社・東京・294p.)
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』(大修館書店・376p. + viii)
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」(『学習院女子短期大学紀要』 pp.96-112)
- 高見健一 (1996) 「日本語の数量詞遊離について - 機能論的分析 -」(『日本語言語学会 第112回大会予稿集』日本言語学会 pp.41-46 ならびに同大会での口頭発表)
- Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances*, Blackwell, Oxford and Cambridge.
- Kato, Shigehiro (1995) "On the Semantic Features of Japanese Adjectives" in *Tokyo University Linguistics Papers (TULIP) VOL.14 Festschrift for Prof. Dr. TSUCHIDA Shigeru* The University of Tokyo pp.681-698.
- Kuno, Susumu (1978) "Theoretical perspectives on Japanese linguistics" in *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, J. Hinds and I. Howard (eds)
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things - What Categories Reveal about the Mind-*, The University of Chicago Press, Chicago and London
- Muraki, Masatake (1974) *Presupposition and Thematization*, Kaitakusha, Tokyo
- Shimozaki, Masaru (1989) "The Quantifier Float Construction in Japanese" (『言語研究 vol. 95』, 日本言語学会)
- Smith, Neil and Wilson, Deirdre (1979) 『現代言語学 - チョムスキー革命からの展望 -』(今井邦彦監訳・山田義昭・土屋元子訳 新曜社・東京・1996年 modern linguistics - The Result of Chomsky's Revolution, Penguin Books, London からの翻訳)
- 『言語学大辞典第6巻・術語編』(三省堂・東京・1995年)
- 『岩波国語辞典第五版』(西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 岩波書店・東京・1994年)